

超未熟児の養育に関するアンケート調査

(分担研究名) ハイリスク児の調査に関する研究

(研究協力者名) 小田良彦
(協同研究者名) 永山善久

(要約) 平成5年度班研究で予後を調査した超未熟児の養育について、アンケート調査を行った。アンケートは19施設の協力を得て、超未熟児141例と、対照としてローリスク成熟児122例について行い、以下の結果を得た。①超未熟児の養育について、6割の母親がその身体発育、運動発達、精神発達に不安を抱いており、これらの育児不安に対し適切な育児支援が必要である。②定期健診、保健婦の訪問に対して、親は超未熟児と言う特殊性を考慮した的確な指導を期待しており、健診医、保健婦の再教育を含めた健診システムの整備が必要と考えられた。③母親の就労や少子化により、遊び相手の不足や子育ての孤立による不安が多く、病児保育やデイ케어センター施設の整備が必要と考えられた。④NICU退院後に6割以上の児が再入院しており、小児救急医療体制の整備が重要と考えられた。

(見出し語) 超未熟児、養育、育児不安、育児支援

緒言：ハイリスク児は後障害発症の頻度が高く、NICU退院後も医学的介入、社会的支援を必要とする例が多い。これらの児は周産期医療から一貫したシステムのなかでフォローされ、育児支援を受けるべきである。本研究では超未熟児のフォローアップの現状をアンケート調査で明らかとし、有効な支援体制の整備について検討した。

研究方法：調査は平成5年度本班研究で予後を調査した1990年出生の超未熟児の母親にアンケートで行った。対照として同時期、同一施設に入院したローリスク成熟児の母親にも同様のアンケートを行った。アンケートの調査項目は、家族構成、患児の身体発育、精神運動発達についての不安の有無とその時期、育児上の悩みについてである。調査期間は1994年9月から12月である。

研究成績：超未熟児についてのアンケートでは、19施設の141例から回答が得られた(回収率52%)。それらの児の3才時における予後は正常が106例、境界が15例、異常が20例で、後障害の内訳は脳性麻痺が17例、精神遅滞が8例、てんかん4例、視力障害9例、聴力障害4例であった。対照例として18施設の122例から回答が得られた。

家族構成では超未熟児群と対照群とで差はなく、約7割が二世世代家族で、そのうち2割は同胞のいない“一人っ子”の核家族であった。身体発育についての不安は、超未熟児の66%にみられ、対照の21%を大きく上回っていた。家族構成による差はなく、不安を感じる時期はNICU退院直後と1才頃に多かった。

運動発達についての不安は超未熟児全体で50%にみられ、脳性麻痺の無い児に限っても44%にみられた。歩行に関する不安が最も多く、不安を感じる時期も12~24カ月に集中していた。

知恵に関する不安は41%にみられ、年齢が長ずるに連れて理解の悪さ、集団の中での自閉傾向や多動傾向などで、不安を感じるようになる傾向がみられた。

言葉の遅れに関する不安は、超未熟児の48%にみられ、その時期は24~36カ月に集中していた。対照でも13%にみられたが、その時期は18カ月前から早く、発音の不明瞭や吃音に関する不安も含まれていた。

眼に関する不安は55%にみられ、未熟児網膜症の急性期の不安はNICU退院前後に多く、視力についての不安は3才頃に多くみられた。また、斜視についての不安も12%にみられた。

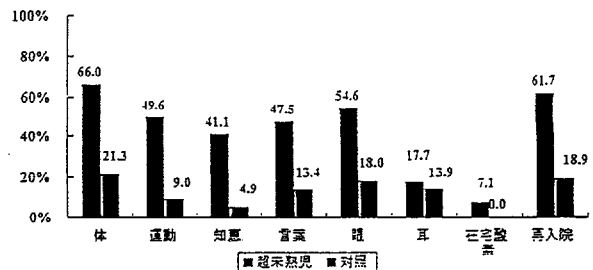
耳に関する不安は、超未熟児と対照とに差はなかった。

NICU退院後の再入院は超未熟児が62%と、対照の19%を大きく上回っていた。呼吸器感染症によるものが最も多く、喘息も対照の2倍の頻度にもみられた。

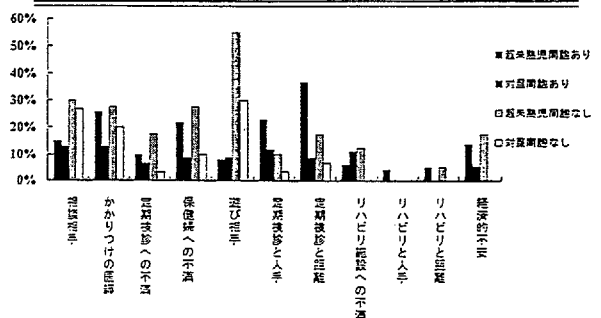
育児上の悩みでは、近所に信頼できる家庭医がいなく(26%)、保健婦の訪問、指導に不満(23%)を持っている例が多かった。また、“定期健診受診時に人手が足りずに困った”(19%)、“距離が遠くて困った”(31%)、“健診そのものに不満を感じた”(12%)等の意見がみられ、特に、同胞がいる場合に受診に困ることが多くみられた。逆に同胞がいない場合には、育児上の相談相手(30%)や遊び相手がなく(55%)、孤立していることが多かった。経済的不安は15%にみられた。

考案：以上の結果より、超未熟児の養育においては例え予後が正常であっても育児不安が大きく、強力な育児支援が必要であることが明らかとなった。特に①地域医師や保健婦の育児支援への取り組みの強化、②健診医や保健婦の研修、再教育を含めた健診システムの整備、③働く母親の支援としての病児保育、デイ케어センター施設の整備、④地域小児救急医療体制の整備が強く望まれていると考えられる。

児の発達、病気に対する不安



育児上の悩み 同胞あり、なし別





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



(要約)平成5年度班研究で予後を調査した超未熟児の養育について、アンケート調査を行った。アンケートは19施設の協力を得て、超未熟児141例と、対照としてローリスク成熟児122例について行い、以下の結果を得た。超未熟児の養育について、6割の母親がその身体発育、運動発達、精神発達に不安を抱いており、これらの育児不安に対し適切な育児支援が必要である。定期健診、保健婦の訪問に対して、親は超未熟児と言う特殊性を考慮した的確な指導を期待しており、健診医、保健婦の再教育を含めた健診システムの整備が必要と考えられた。母親の就労や少子化により、遊び相手の不足や子育ての孤立による不安が多く、病児保育やデイケアセンター施設の整備が必要と考えられた。NICU退院後に6割以上の児が再入院しており、小児救急医療体制の整備が重要と考えられた。